

Title	空間の変形と変身の時間:デヴィッド・ハーヴェイとアントニオ・ネグリにおける社会変革と想像
Author(s)	鄭, 鎬碩
Citation	聖学院大学論叢, 第 28 巻第 1 号, 2015.10 : 121 -135
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5535
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

〈原著論文〉

空間の変形と変身の時間

——デヴィッド・ハーヴェイとアントニオ・ネグリにおける社会変革と想像——

鄭 鎬 碩

抄 録

本稿は、デヴィッド・ハーヴェイとアントニオ・ネグリの社会変革と想像をめぐる議論を中心に、二人の理論的相違を明らかにすることを目的とする。ハーヴェイとネグリは、マルクス主義における目的論的、決定論的傾向を乗り越えるという類似した問題関心から出発したが、ハーヴェイが、変革をめぐる弁証法的展望を保持しつつ空間の再編における「建築家の反抗」に焦点を合わせるのに対し、ネグリは、改められた時間性に基づく唯物論の再定義を通じて「貧者」がもつ生産的活力の無媒介的な展開を求める。本稿は、こうした理論的分岐の相貌を「空間の変形」（ハーヴェイ）と「変身の時間」（ネグリ）として理解し、その相違が社会変革と人間の想像力に対する異なった捉え方に起因することを明らかにする。

キーワード：社会変革, 想像, 弁証法, 変形, 変身

1. はじめに

本稿の目的は、デヴィッド・ハーヴェイ (David Harvey) とアントニオ・ネグリ (Antonio Negri) の社会変革についての議論を比較し、その相違を明らかにすることである。ハーヴェイとネグリは、マルクス主義の遺産を土台にしたおよそ40年間の探求を通じて、それぞれの専門領域であった地理学、政治経済学を超え、人文・社会科学全般において広く参照されるようになった。また、近年のグローバル化と新自由主義の推移に対する彼らの批判的分析は、社会変革に向けられた多様な社会運動に大きな刺激を与えている。

ただ、これまで二人の議論は類似性の観点から論じられることが多く、彼らの差異が注目されることはほとんどなかった。そこで、本稿では、二人の社会変革論においてそれぞれ異なる形で織り込まれている「想像」の位置づけに注目しつつ、マルクス解釈をめぐる彼らの理論的分岐の相貌を分析的に描くことで、二人の思想的相違を浮き彫りにしていく。

2. 文脈と対象

2.1 グローバル化する世界における抗議運動の高揚とマルクス主義の変容

ハーヴェイとネグリの社会理論は、最近における大衆運動の高揚に対する理論的説明として、また昨今のグローバルな資本運動および対抗運動の流れを踏まえた新しいマルクス解釈の試みとして注目されている。

1990年代後半以来、世界各地では、新自由主義的政策、権威主義や腐敗、代議制の機能不全へのラジカルな問題提起を含んだ大規模デモが相次いで勃発し、社会変革について関心が高まった。グローバルな金融市場の脆弱性が露呈されたアジア発通貨危機（1997年）以来浮上してきた抵抗運動の流れは、WTOシアトル閣僚会議における抗議デモ（1999年）などの「反グローバリゼーション運動」やアメリカでの同時多発テロ事件以降のイラク反戦運動の動きと重なりながら、より国際的な性格を強めてきた。とりわけ、サブプライム住宅ローン危機（2007年）、「リーマン・ショック」（2009年）など、アメリカ発金融危機が広く波及するなか、多くの大都市では雇用不安や失業、セーフティネットの欠如、経済格差に対する異議申し立てが顕著となり、2011年チュニジアでの民主化運動によって触発された「アラブの春」とスペインでの「怒れる人々」運動、それに大きな刺激を受けたヨーロッパ各都市でのデモとアメリカのウォールストリート占拠運動（Occupy Wall Street）は、1960年代末の「若者の叛逆」を彷彿とさせる様相を呈しつつ、多くの議論を生み出した⁽¹⁾。

最近ハーヴェイとネグリの著作が大きく注目されるようになったのは、以上のような背景においてである。彼らの研究および発言は、多様な背景をもつ各地の大衆運動を俯瞰的に捉えるマクロな視点と体系的説明を提供し、また未来のオルタナティブを考えるうえで刺激的な政治的想像力を促すものとして広く参照、引用されている。

他方、彼らの議論への注目、近年の全世界的な「マルクス・ブーム」⁽²⁾、あるいは「マルクスの帰還」^{リダックス}（Harvey 2000: 3）と呼ばれる現象を物語る好例でもある。マルクス主義理論家としてのハーヴェイとネグリは、あらゆる社会問題の基底を貫く構造的矛盾としてのグローバルな資本運動を自らの研究の中核に据え、不平等の深化、代議制の形骸化、蔓延する腐敗などきわめて多様なイシューをめぐる抗議と変革運動を、資本運動との対立・拮抗関係のなかで捉えてきた。彼らは、一方では、現実のアクティビズムのダイナミックな展開における偶発性を視野に入れつつ、他方では、マルクスの洞察の変わらない有効性を擁護しながらその説明力を高めようとしてきた。そうした努力には、グローバル化を背景にしたマルクス主義理論の「自己革新」の一端が示されていると考えられる。

2.2 社会変革と想像：ハーヴェイとネグリ

ところで、これまでハーヴェイとネグリの意見の相違が注目されることはあまりなかった。というのも、彼らは、マルクス主義の新たな解釈を試みるというスタイルを共有しており、二人とも最近の大衆運動を好意的に捉えながら、分析の対象としてきた。さらに、二人は互いの著作を参照し、しばしば好意的にコメントしてきた。

ところが、近年、都市運動や公共財など、二人の分析対象やテーマが近接してくるなかで、彼らの議論における共通性と相違というテーマが浮かび上がってきた。例えば、ネグリは、「略奪による蓄積」と自由主義の階級の本質についてのハーヴェイの分析に賛同し (Negri & Hardt 2009: 230-1; 266)、ハーヴェイは、ネグリ＝ハートの「コモンズ」についての考察を自らの議論を受け入れている (Harvey 2012=2013: 130)。しかしながら、他方において、彼らは現在の世界秩序を異なった形で捉えている (ハーヴェイの「新帝国主義」とネグリの〈帝国〉)。さらに、『コモンウェルス』に対するハーヴェイの問い (ハーヴェイ 2013) や批判的なコメント (Harvey 2012=2013: 250) からは、ネグリの理論的傾向に対するハーヴェイの違和感がうかがえる。ただ、こうした二人の重なり合いや食い違いの意味を考えるためには、まず彼らの理論を特徴づける根本的な立場上の相違に対する踏み込んだ考察が行われなければならない。つまり、ハーヴェイがとりあげた一部論点のみならず、彼らの理論的企画を複眼的に捉える視点が必要となると思われる。

二人の相違に注目するもう一つの意義として、比較の視点をもつことで、彼らの理論に対するより明瞭な解釈の可能性が得られることを挙げたい。ハーヴェイとネグリの著作には、ポストモダニズムやポスト構造主義を含め、当代の研究動向と思想潮流を幅広く渉猟し、総合するという傾向が著しい。その大量の参照と、抽象語を駆使する文体は、ときとして全体の理論的企画に対する鮮明な理解を妨げるようにも見える⁽³⁾。ただ、そこで紡ぎだされている思考の交織物が単なる知的誇示や理論的折衷主義ではないなら、そこに通底する一貫した立場に注意を払い、また二人の差異にも目を向けざるをえない。

さて、本稿でとりあげるのは社会変革と想像についての議論である。冒頭で指摘した動向、すなわち近年活発化した対抗運動の流れとマルクス主義の歴史的変容の重なり合いのなかで改めて浮上したのは、変革運動の政治的自律性をめぐる質問である。マルクス主義の視点に立つなら、昨今のグローバル化のプロセスは、全世界を市場として包摂しつつ社会のあらゆる局面に矛盾を刻み込む資本運動、およびそれに伴う周期的危機の到来と再構造化の過程にはかならない。ところが、そのなかでますます先鋭的な問いとして浮上し、伝統的なマルクス解釈の再審を迫るのは、そうした資本の構造的規定力に対抗して立ち上がる大衆運動の行方をめぐる問題である。そもそも抵抗によって社会が変革できると考えてよい根拠は何か、そこで切り開かれる未来に関してどのような展望がもてるのかという問いは、いずれも資本主義の経済法則に抵抗する政治的实践をどう位置づけるかをめぐる理論的問題である。マルクス主義は、資本と抵抗との間の「グローバルな規模の対立」が

全景化しつつある今日において、再び「最終審級における決定」をめぐる「古くて新しい問い」の前に立たされているといえる。

興味深いことに、ハーヴェイとネグリは、共通して「想像^{イマジネーション}」という概念を用いながらこの問題に答えようとしている。そもそも想像は、イデオロギーについての議論を除けば、主流のマルクス主義においては周縁的なテーマであった。歴史的な社会変容に内在的にかかわるメディア・コミュニケーションの問題と関連して、1990年代後半から想像についての学術的関心が急激に高まったにもかかわらず⁽⁴⁾、こうした事情は大きく変わっていない。その意味で、ハーヴェイとネグリの議論は、マルクス主義における「想像」の理論的位置づけを試みた数少ない例でもある。

以上のような文脈において、本稿は「想像」の位置づけを念頭に置き、二人の理論を比較していく。ただ、二人の膨大な理論的軌跡を考慮し、本稿では、『希望の空間』(Harvey 2000)と『革命の時間』(Negri 2003)を中心的なテキストとしてとりあげる⁽⁵⁾。

3. マルクス主義社会変革論を超えて：空間と時間についての再解釈

3.1 ハーヴェイの問題設定：資本運動の分析における地理—空間性の復権

ハーヴェイとネグリは、従来のマルクス主義における時間性に異議を唱えることで自らの課題を見出した。ハーヴェイは史的唯物論における空間性の復権を通じて、ネグリは、新しい時間性による唯物論の再定義を通じて、それぞれマルクス主義の革新を試みてきた。

まず、ハーヴェイが空間というカテゴリーに最大の戦略的重要性を与えていることは明らかである。ハーヴェイによれば、マルクスとエンゲルスの議論において、空間・地理の問題系は重要な位置を占めていた⁽⁶⁾。ところが、他方においてマルクスは、差異を生み出しながら資源と労働を包摂していく「グローバルな再領土化」の相貌を適切に捉えられず、それを、文明=中心から野蛮=周辺へ流れていく目的論的で拡散主義的なモデル(SOH 31-32)として描いた。そこでは、国民国家の力学、貨幣金融のローカルな効果など資本が蓄積される空間の諸条件が考慮されなかった。その最大の問題点は、地理(空間)に対する歴史(時間)の優位であり、何よりも必要なのは、マルクス主義の理論および実践において空間的・地理学的分析の軸の確立することである(SOH 58)。

こうした認識から、ハーヴェイは、資本蓄積と景観地理の生産を結びつける新たな分析の視座を提示し、生産・交換・分配・消費を支えるインフラストラクチャの構築や物流コストの変化、国家の主権活動や領土の組織化と緊密に照応する資本の「回避^{フイック}・修正^{クス}」を分析してきた(Harvey 2003)。

こうした「地理—空間性の復権」という基調は、彼の社会変革論にも貫かれている。空間の再構造化が、拡大する地理的規模において階級と生産関係を再生産していく漸進的な過程だとすれば、そうした過程に対抗する革命もまた地理的に広がっていくはずである(SOH 26)。「資本のための

空間調整」があるなら、「労働者のための空間調整」も可能であるという論理 (SOH 30) に基づき、ハーヴェイは、失業と格差、環境破壊と資源毀損、略奪的な金融機関に対するあらゆるローカルな闘争を、地理的諸条件をめぐる「空間調整」への介入として理解する。

3.2 ネグリの問題設定：新しい時間性に基づく唯物論の再定義

ハーヴェイが、歴史唯物論の最大の弱点を空間分析の欠如に見出し、「歴史—地理的な唯物論」を試みたとするならば、ネグリは、歴史唯物論の決定論的傾向を乗り越えるために新しい時間性を導入し、唯物論そのものの再定義を試みた。

ネグリは、1960年代イタリアにおける労働者主義運動オペライズモおよび自律・自治運動アウトノミアにかかわって以来、マルクスの価値形態論を読みなおすことで、資本主義危機の最終局面に現れるとされてきたプロレタリア闘争を、いつでも体制を転覆しうる「力」として捉えなおすための理論的格闘を繰り返してきた。それは主に価値化の二つの系列に関する議論に基づいている。マルクスの『政治経済学批判要綱』をめぐる新しい解釈において、ネグリは、生産過程における「生きた労働」の自己価値化 (self-valorization) の系列が、余剰価値化に向けられた資本運動と対立し、またそれを内在的に限界づけていると論じた (Negri 1991)。こうした政治的な自己構成 = 自己価値化の自律性への注目は、マルクスの著作に見られる進歩主義的で目的論的な時間理解および、第2インターナショナルにおいて頂点をなした経済決定論との決別を促すものであった。ネグリの狙いは、「革命」を、資本主義の最終審級ではなく、瞬間毎の政治的判断の問題として位置づけることであった。ただ、資本運動の矛盾についての「科学的」認識が政治的決定の実践的要求によって置き換えられたとき、「革命」はどう捉えられるのか。資本主義の危機が訪れるカレンダー上の時点を待つのではなく、むしろ自らの「決定」によって革命を到来させることができるのであれば、革命と唯物論は、新たな時間性との関連で再定義されなければならない。

ネグリによれば、従来の哲学的伝統において時間は、しばしば単なる外挿的な尺度として理解されてきた (TFR 149)。ところが、革命実践の噴出という出来事を捉えるためには、物質や時間についての新たな概念化が必要となる。すなわち、変革の試みは既定の法則に沿って運動する固定的な物質ではなく、新たな現実をなす「出来事」である。それに名を与える行為によってはじめて新しい物事が出現する。そのとき、時間は「知識 (= 名称) を包み込む外皮」ではなく、物質的な存在を成立させる行為 (= 命名) と内的にかかわる。このような「共通名の構成にける内的要素」フモン・ネーム (TFR 151) としての時間性は「カイロス」と呼ばれる。資本が付与する価値尺度 = 労働時間としての「クロノス」は、計量可能性に基づく貨幣の物象化した一般性が転覆される革命的な瞬間を認識できない。それに対し、カイロスは「同質的で空虚な時間」の尺度として外挿されたクロノスの抑圧性と虚構性を暴きだしながら、労働が自らを測定不可能な価値として示しだす瞬間を捉える。こうして、ネグリは、資本運動の価値化のための時間軸と全く異なる時間性を導入することで、潜

在的な系列にすぎなかった政治的闘争の存在論的位相を強調し、抵抗という出来事の物質性を中心に据える新たな唯物論を提唱した。

4. 弁証法とユートピア

4.1 ハーヴェイ：空間をめぐる弁証法的ユートピア主義

以上見てきた空間性の復権（ハーヴェイ）と時間性の再定義（ネグリ）に関する議論は、いずれもマルクス主義における目的論的傾向から脱却し、人々の対抗に新たな理論的位置づけを与えるものであった。弁証法とユートピアについての議論には、この問題をめぐる二人の視点の差異が鮮明に表れている。

まずハーヴェイは、社会変革に対する自らの構想を「弁証法的ユートピア主義」と呼んだ。彼は、マルクス主義の歴史認識が凝縮された「弁証法」に、人々によって想像され、欲望される空間性としての「ユートピア」を組み合わせ、時間性を優先させる従来の弁証法とは異なる、常に場所が問われる「新しい弁証法」を提出している（SOH 55）。

ハーヴェイによれば、既存の歴史唯物論は、各地の地理的な特性を時間的な軸のなかで総合し、総体的な革命を論じる傾向が強かった。そうした時間を特権的範疇とする弁証法の代わりに、空間をめぐる弁証法的運動に目を向けたときに重要となるのは、人間の役割、すなわち、社会を作ることで自らを変容させていく人々の主体的能力である。

私たちが集団的に都市を生産するとき、私たちは集団的に自らを生産する。われわれがどのような都市を求めるとかをめぐるプロジェクトは、人間の可能性をめぐるプロジェクトでもある。すなわち、これは、私たちがどのような存在になりたいのか、もしくははなりたくないのかをめぐるプロジェクトである（SOH 159）。

「人間は都市を作る過程のなかでまた自分たちを作り出した」（Park 1967: 3; SOE 159）という言明を喚起しつつ、ハーヴェイは、人間と都市空間が互いに影響しあう円環関係のなかで社会の変革を論じる。空間は、人間の集団的な自己再生産と同一のプロセスにおいて生産される。だから空間の変形に対する人間の介入は、自らを変えていく自己変革の企てでもある。この「自らを作りなおす」（SOH 159）という企画に「希望」がある理由は、そこにユートピアの想像があるからである。本来、あらゆるユートピアは、それが特定の空間において物質化^{マテリアライズ}=実体化されるとたん強烈な矛盾を露呈する。ユートピア的構想に物質的な形態を与える作業は、必然的にそれを実現するプロセスに対するコントロールを伴う。そのため、ユートピア的想像は、その建設現場において空間的形態の統制へと転化してしまう（SOE 173）。ところがハーヴェイは、ユートピアを「完成形」ではなく、

物質化・空間化をめぐる永続的な介入の「過程」として理解しなおすことで、ユートピアの実現に伴う妥協や閉鎖の問題（SOE 180; 183）が迂回できるという。

つまり、「弁証法的ユートピア主義」とは、空間の変形をめぐる不断な介入のことである。人間は、未来への想像力を発揮し、空間を構造化する資本運動の規定力に抵抗する。資本運動が各地での地理的な修正を通してはじめて自らの矛盾を回避し、グローバルな政治経済システムとして機能するならば、それに対する抵抗もまた空間の再構造化に対するローカルな介入によって可能となる。それは、空間の変容でありながら、社会の変革であり、また人間の自己革新となる。

4.2 ネグリ：力能の反弁証法的展開と反ユートピア主義

ネグリの理論もまた、弁証法との対決という側面をもつ。彼は、弁証法を労働者階級の潜在力＝力能を捉え損ねる思考として批判し、それに対して執拗に反対してきた。

ネグリが批判する弁証法は、大きく三つである。第一に、資本家は生産道具を提供し、労働者はそれに応じることで自らが利潤蓄積の道具となっていく「道具の弁証法」がある。労働者はあらゆる価値の生産者であるにもかかわらず、こうした過程において資本に従属してしまう。第二に、民意と主権をめぐる「代議の弁証法」がある。社会契約、一般意志、代議制に関するあらゆる理論は弁証法的な超越に基づいており、人民の意思を「媒介」する諸制度は、個々人の統合と支配を正当化する。これに対し、ネグリは、全ての人々が豊かな特異性を保持しつつ権力を構成するような反弁証法的・非超越的・内在的な運動の理論的可能性を基礎づけようとしてきた。第三に、資本主義的再構造化と労働側の対抗をめぐる「歴史の弁証法」がある。資本は、生産性に照応する生産関係を生み出し社会を構造化してきた。しかし、そこには必ずプロレタリアとの敵対があり、資本と抵抗という二つの拮抗する力こそが資本主義の歴史的ダイナミズムをなす。これについても、ネグリは、歴史を、資本と対抗との相互作用ではなく、労働の抵抗に対する資本の反動という一方的な力関係として捉える⁽⁷⁾。

以上の三つ水準においてネグリは、弁証法的連鎖から「労働者＝人民＝抵抗」の系列を切りとり、それを「いっさいの弁証法的次元の外にある活動」（Negri 2006＝2007: 136）として位置づけ、「支配と抵抗の同一視を断ち切」（Negri 2006＝2007: 136-8）ろうとする。こうした徹底した反弁証法こそ彼の理論を特徴づけている。

「権力に対する抵抗の優位性」（Negri and Hardt 2004＝2005: 122, 123）を確認させる歴史的な条件としてネグリが注目するのは、1960年代末以降の「ポスト近代的生産」である。「非物質的労働」と呼ばれる情報・知識集約型生産、そして「感情労働」に基づく経済が、従来の生産方式を代替する傾向にあり、あらゆる社会的余剰は、人間の生の全ての時間に満ちた「知識のネットワークと協同的な相互作用」によって創出される。これは、時間・空間的制約の減少と共に、未曾有の権力転覆の可能性を生み出す。したがって「資本の内部において資本に対抗していた労働力の古い弁証

法」は「すでに無用」となったという宣言がなされる (Negri 1988: 225)。

他方、全地球を覆う社会的労働を搾取しつづけ、コントロールするために、主権は〈帝国〉という形にとらざるを得ない (Negri and Hardt 2000)。主権のグローバルな展開の下、労働者たちは、生の全ての領域において資本の命令と「直接」敵対する。労働者は、もはや受動的に構成されてから能動的な政治勢力へ転化するという弁証法的軌跡を踏む必要がない。そのいかなる媒介も必要としない主体性の表出こそが「解放」を来らせる (TFR 229)。またそこでは、構想したものを実体化していくという観念と物質の弁証法的関連も否定される。つまり、それ自体として展開されていく労働する人々の力能が解放を来らせるだけで、それに対してはいかなる計算や予断、いかなる記憶の関与が許されない。ネグリにとって、ユートピアは「未来に投影された欲望」に過ぎず、「来たるべきもの (being-to-come) の名を提示することはできない」とされる。こうしてネグリは、労働の力能が有する反弁証法的な位相を徹底化していくなかで、ユートピア主義を却下する。

5. ハーヴェイとネグリにおける社会変革：変形の想像と変身の想像

5.1 空間の変形と建築家の想像

以上のように、ハーヴェイが空間の弁証法的な再形成に期待を寄せつつ、過程としてのユートピア主義を提案するのに対し、ネグリは、弁証法やユートピア主義とは全く無縁な新しい時間性との関連で、無媒介的な主体化を想定しようとした。ところで、これら二つの解放戦略は、その担い手となる人間の想像力についての特定の理解に基づいている。それは「変形」と「変身」という社会変革をめぐる異なる概念化において圧縮的に現れている。

まず、ハーヴェイは、ユートピア的理想の生産に関与する^{フィギュア}形象として「建築家」を考える。ハーヴェイは「階級」概念の有効性を主張しつづけるが (Harvey 2005)、その分析対象となる都市空間の再編という観点から見たとき、建築家は格別の重要性をもつ。

建築家は、空間を構成し、組織する全てのプロセスにおける中心的存在であり、行為者としての人間の^{メタファー}隠喩である (SOE 200)。頭のなかで構造を想像するという意味で最悪の建築家の方が蜜蜂より優れているというマルクスの言葉 (Marx 1967: 177-8) に着目し、ハーヴェイは、人々が自らの潜在力に気づかないまま働きつづける蜜蜂ではなく、常に複数の選択肢を検討しつつ、想像の開かれた可能性と向き合う建築家であると主張する。また想像という契機に最重要の戦略的な地位を与える。それはなぜか。

資本家は、資本の投資による利益達成のために、企業家、金融関係者、開発業者、芸術家、建築家、官僚、労働者など多くの関連者の「想像」を動員する。また、そこにはあらゆるイノベーションや変則的方法をめぐる「想像」が必要となる。建築家は、資本プロジェクトのなかでそうした想像を時間的、空間的に具体化していく役割を担う。そこでは、既存の物質的条件によって完全に規

定されない、ある程度の自由な遊戯あるいは新しい創造への挑戦が認められ、また求められる (SOH 202-4)。建築家は、特定のユートピア的理想が空間的に形作られる現場の具体性にかかわりながら、それが資本運動の直接的な反映にならないよう働きかける。

想像的なものの物質的実現をめぐる弁証法は、資本主義がいかにして反復のなかで自らを変化させ、革命的な生産様式になるのかと関連して両義性をみせる。ケインズが認めたように、資本主義は（尊重すべき）期待と（破壊的な）投機行動の混合によって推進される巨大な投機のシステムでしかない。もし、このような仮想性、想像性が瞬間毎に私たちを取り囲んでいるなら、そのなかには漸増する想像的オルタナティブも存在するはずである (SOH 206)。

資本主義そのものが巨大な「想像のシステム」であるなら、想像は変革の有効な戦略となる。ハーヴェイは、想像という、それ自体として観念的でありながら物質の生産に直接かかわる契機を導入することで、主体（建築家）と外部世界（空間）を媒介する弁証法的循環において急進的な変革が起こりうる理論的余地を設けたといえる。

5.2 貧者の変身：身体と想像力

一方、ネグリは、革命の担い手として「マルチチュード」という概念を提示し、近年においては「貧者」の「変身」について語る。まず、注意を払いたいのは、「マルチチュード」や「貧者」が、既存の政治的^{フィギュア}形象と根本的に異なる位相をもつという点である。個人、国民、市民などの主体概念は、近代民主主義体制における仮想的な^{フィクション}擬制である。しかし、その「フィクションによる媒介機能」がこれ以上^{リフォーム}改革できないくらいに形骸化している今日においては、それら実質を伴わない空虚な形式 (form-figure-fiction の系列) を廃棄する「実質的な力」の登場が求められる。そこで召還されるのが、活力溢れる生産性をもちながらも富から排除されてきた「貧者」である (鄭 2009: 54-55)。

貧者は、その定義上、あらゆる形式を拒否する。形式を伴わない純粋な「実質」としての貧者を特徴づけるのは身体性である。貧者の身体は、あらゆる弁証法的媒介や超越に絡めとられることなく自らを構成していく。身体に備えられた潜在力の展開においては、^{フォーム}形の変化をめぐる社会工学的な介入の余地がない。ネグリにおける社会変革が、労働力に特定の形式を与えな^{リフォーム}おす改革あるいは^{トランスフォーム}変形ではなく、^{メタモルフォーシス}身体をめぐる変身と呼ばれるのはそのためである。

変身という言葉で私が意味するのは、感覚的、認識的、精神的変異の集合である。(中略) 新しい機械およびその機械によって構成される周辺世界のなかで、生産と再生産のなかで、巨大都市と宇宙のなかで産出される数々の変異のことである (TFR 245)。

フーコーの生政治についての議論に刺激を受け、きわめて含蓄的な表現で記述される貧者の「変身」は、基本的に機械と合体=変異=生成を意味する⁽⁸⁾。ただ、機械と結合された人間（「人間—機械」）が自ずと革命へと向かうわけではない。ネグリの当初の問題感心がそうであったように、革命の到来は、決して科学的に予測できない。貧者の変身を駆動する力とされるのは「想像」である。

ネグリは、労働者と主権者を媒介する「超越的想像力」に対抗し、スピノザ的な「存在論的想像力」（TFR 156）を擁護する。「超越的想像力」は、過去の記憶に基づいた未来へのイメージとしてファンタジーの幻想、あるいは権力の再生産に動員されるイデオロギーとしてのフィクションである。これに対し、「存在論的想像力」は、過去の同一性=反復の原理によって縛られることなく、未来へ向けられた創造的構築を促す。これまでネグリは、資本運動をそれより優位に立つ労働の自己価値化から明確に区別し、さまざまな議論領域においてそうした二分法的区別の意味を確認してきた。想像をめぐる議論においても、「形式—擬制—幻想」^{フィクションファンタジー}に対する「生—物質—想像」の優位が主張される形で、それが繰り返されている。

ネグリのいう「貧者の想像」がもつラジカルな意味は、それが「他者への想像力」に基づく寛容の倫理を拒否している点にある。寛容の倫理が想像の対象としての他者を前提しているとするれば、貧者は、主体的に想像するだけであって、決して想像の対象となることがない。権力をもつ相手からの寛容、承認を求めるのではない。そうした一切の弁証法的行程の隘路と無縁な地点において練り上げられたネグリの「想像」は、どこまでも肯定的な力として予測不可能な未来を切り開く「ジェスチャー」（TFR 174）として理解される。

6. 空間の変形と革命の時間：変革対象との距離と変革のエネルギー

以上、確認してきたように、ハーヴェイとネグリは、マルクス主義に温存されている目的論的要素との決別という問題関心から出発したにもかかわらず、全く異なる展開を示した。ハーヴェイは「空間を作りなおす」弁証法的過程における人間の主体的想像に解放の可能性を見出すが、ネグリは「世界を変える」というところの工学的操作を拒否する代わりに、社会を再生産する身体そのものが変異を起こすことで独自の主体化を遂げるという構想を提示した。それでは、以上のような相違は一体どこに起因しているのか。

まず、二人における「想像」の主体と客体について考えて見よう。「建築家」と「貧者」は、いずれも想像の主体である。ところが、建築家が（一次的に）変革されるべき都市空間を想像し、また（二次的に）そうした都市で暮らす私たち自身の姿を想像していくのに対し、貧者は決して外部世界を想像しないし、自らが想像の対象となることもない。変革は変身によってのみもたらされるため、想像は何らかの対象によって限定されることなく、喜びに満ちた身体の変異を動機づけてい

くだけである。

ここで気づくのは、社会変革の担い手（主体）と変革の対象（世界）の間の「距離」をめぐる対立である。すなわち、ハーヴェイにとっては永遠に解消されない「変革対象との距離」が、ネグリにとっては完全に消えているということが分かる。変革されるべき対象との距離が保ちつづけられるのは、社会変革を「他動詞的に」認識しているからである。そこでは、対象との距離こそが主体的想像が駆動されるための前提条件となる。ハーヴェイの場合、主体と客体の間の距離は、主体側にとって常に考慮すべき空間性の問題を提起しつづけ、また主体の倫理的資質を問う。実際、建築家の想像がどこまで有効な反乱になりうるかも、建築家の空間・物質・地理に対する知識・技術・感受性にかかっているといえる。建築家は、人間の類的属性に関する鋭い自覚とそれに伴う権利、そして自然に対する責任に基づき、空間をめぐる弁証法的介入に向かうことになる。

他方、ネグリは、社会変革をあくまでも「自動詞的に」理解し、「自他の距離」が消え去った地平において変革を論じる。そこには、ハーヴェイが慎重に回避しようとするユートピアの建設にまつわる困難さが起こりうる論理的余地がない。

次に、「対象との距離」が変革のエネルギーの問題と深くかかわっている点について触れたい。ハーヴェイのいう反乱的建築家の想像と空間の変形という展望は、世界を形作る^{フォーム}、すなわち「制作的」というべき近代的世界観（今村 1994）を背景にしている。ハーヴェイ自身が認めているように、世界の建設者、「完璧な立法家」としての神（SOH 200）、そしてそこから類推された人間の創造性を肯定する世界観は、根本的に人間の「建築への意志」（will to architecture）（柄谷 1979=1989）によって支えられている。この類の主体的エネルギーは、冷静な知識および他者との合理的な熟議という倫理的価値と両立するだろう。しかしその一方で、そこには常に制作の対象（自然）に対する抑圧的な統制あるいは家父長的な倫理の適用という問題点が付きまとう。

他方、ネグリにおける変革のエネルギーとは、変身する「いきもの」の「抑えきれない欲望と喜び」である。ここでキーとなるのは、他者との交わりの中で感情の高揚^{アффекト}＝情動を経験し、力を増大させるという開放的姿勢にほかならない。だが、ハーヴェイがこだわりつづける人間という「形式」を大きく超え、機械的なもの、モンスター、異種間の愛について議論へと展開されるなかで、ネグリの「変身」は、破壊的な政治的結果をもたらす可能性について理論的に全く無防備であるという大きなリスクを負う。また、世界に対する距離が失われ、知識人さえも「変身」の内部に参加すべきとされるなら、変革の実質に対する批判的評価を可能にする「距離」はいかにして確保できるのが疑問となる。

7. 結びにかえて

以上、マルクス主義における時間性と空間性、社会変革のための弁証法、変革の担い手という一

連の論点から、社会変革と想像をめぐる異なった捉え方を中心にハーヴェイとネグリの理論的展開を再構成した。そのなかで浮かび上がったのは、数々の論点を貫く彼らの思想的特質であり、「マルクス主義者」として同一視することのできない二人の異なった思考のスタイルであった。

ハーヴェイは、都市空間をはじめとする対象としての世界に向けられた主体的な想像に変革の可能性を託している。「空間の変形」(transformation of space)と要約されるアプローチでは、対象に向かって想像力を発揮し、その対象との空間的距離における地理的諸条件と不断にかかわっていく主体の技術的能力と倫理的資質が鍵となる。それに対し、ネグリは、対象をもたず無媒介的に展開される生産的潜在力に究極的な変革の希望を見出す。これまで抑圧され、排除され、また収奪されてきた全ての人々は、あらゆる地理的差異を横切るような同時的な蜂起の瞬間、すなわち「変身の時間」(time for metamorphosis)を迎えることで「解放」される。

以上のような二人の差異は、社会変容を考えるうえで、世界を統制と改造の対象として捉え、自らをも操作の対象とする「制作者としての主体」のイメージが依然として大きな理論的分岐点をなしているということを感じさせる。まさにここに、創造性のメタファーとしての生産と制作をめぐる近代的思考をいかにして乗り越えていくかという、今日のマルクス主義の課題が鮮明に表れているといえよう。

最後に、今後の課題として、以上確認したハーヴェイとネグリの思想的スタイルの相違を、現実認識に即して考察することが必要であろう。二人の視点の差異が現実運動の認識にどのような影響を与えるのか、大都市における抗議デモの様相が二人の理論的射程においてどのように捉えられているのかという点が検討されなければならない。すなわち、本稿で試みた二人の相違への視点は、例えば、お祭りやキャンプのようなデモ、すなわち「社会を変える闘争」というより「新たな社会性の創出をめぐる学習・実験」としての性格を帯びるようになった今日の社会運動の新たな側面⁽⁹⁾を検討しながらハーヴェイの「空間の変形」を問い、ナショナリズムやレイシズムなど、それ自体として破壊的な「生成変化」の想像を煽るような大衆運動が噴出しつつける現状を視野に入れつつ、ネグリの「変身の時間」を考えることによって、さらに掘り下げられなければならない。

注

- (1) ハーヴェイとネグリを含め、Saskia Sassen, Sidney Tarrow, Manuel Castells, Judith Butler, Slavoj Zizek, Cornel West, Mike Davis, Craig Calhoun など、多くの著名な知識人たちがこうした状況について積極的にコメントし、『Theory & Event』(Vol. 14, Issue 4, 2011 Supplement) などいくつかのジャーナルが、このテーマで特集を組んだ。
- (2) (<http://www.theguardian.com/world/2012/jul/04/the-return-of-marxism>)〈2015.7.5 確認〉日本においてもこうした現象は著しく、とくに2010年以來マルクス入門・解説書や新訳が相次ぎ刊行されている。
- (3) この問題はとくにネグリの場合に著しい。ネグリの文体に注目した鋭い批判として、Brennan (2003)を参考。
- (4) とくにメディア・文化研究における「想像」への注目に大きな影響を与えたものとして、集团的

共同性の生産と変容において欠かせない役割を果たす、メディアによって媒介された想像 (Anderson 1983), それ自体として社会的リアリティの一部をなし、グローバルな世界秩序の重要要素となる想像 (Appadurai 1990), メディアの普及を背景とした人々の道徳的自己理解としての社会的想像 (Taylor 2004) をめぐる研究を挙げて置く。

- (5) 以下、これらの著作からの引用は、それぞれ「SOH ページ」「TFR ページ」と表す。なお、本稿ではアントニオ・ネグリとマイケル・ハートとの差異を考慮しない。
- (6) 例えば『共産党宣言』では、巨大都市の創出と急速な都市化という内的変換並びに、アメリカ大陸の発見、植民地インド、中国の市場との貿易といった外的展望のなかで、ブルジョアジーが地理的に限られた封建勢力を(内的に)転覆させ、また(外的に)迂回したという点が把握されていた (SOH 24)。
- (7) こうして生産、主権、歴史の各水準において、労働 (抵抗—潜勢力—法構成的力能) の系列を、資本 (支配—権力—法維持的権力) の系列に回収されない歴史発展の原動力として位置づけるための試みは、ネグリの全作業を貫く軸となっている。これは、ニーチェとドゥルーズの議論に基づく権力 (potere ; pouvoir) に対する力能 (Potenza ; puissance) の存在論的優位性、そして支配に対する抵抗の先存性として変奏されてきた。
- (8) ネグリは、一方では、決して「統治の対象」にならない労働者の自己統治というヴィジョンをスピノザからドゥルーズに至る思想的軌跡から導きだし、もう一方では、生産様式の歴史的変容がこうしたヴィジョンにいかなる「解放」の可能性を与えるのかを論じてきた。「変身」は、こうした政治思想の論究と経済学的分析が交差される地点に置かれている。換言すれば、貧者の変身に現実的な「解放」の希望を与えるのは、昨今の生産状況の変化である。貧者は、資本の「外部」が消滅し、非物質的、情動的な生産が付加価値化の主な源泉となる「ポストモダンの状況」において史上はじめてグローバルな権力転覆のチャンスを得る。人工物と結合した「人間—機械」(TFR 152) としての貧者は世界そのものを再生産し、協働的生産を通じて結ばれることで「マルチチュード」となる。
- (9) 五野 (2012) 第4章および伊藤 (2012) の第6章、第7章を参照。

引用文献

- Anderson, B., *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. Verso, 1983.
- Appadurai, A., *Modernity at Large: Cultural Dimension of Globalization*, University of Minnesota Press.
- Brennan, T., “The Italian Ideology,” Gopal Balakrishnan ed., *Debating Empire*. Verso, 2003, pp. 97–120.
- 五野井郁夫 『「デモ」とは何か—変貌する直接民主主義』NHK 出版 2012
- Harvey, D., *Spaces of Hope*. University of California Press, 2000.
- , *The New Imperialism*. Oxford University Press, 2003.
- , *A Brief History of Neoliberalism*. Oxford University Press, 2005.
- , *Rebel Cities: From the Right to the City to the Urban Revolution*. Verso, 2012. (D. ハーヴェイ著 森田成也・大屋定晴訳『反乱する都市—資本のアーバナイゼーションと都市の再創造』作品社 2013)
- 今村仁司『近代性の構造』講談社 1994
- 伊藤昌亮『デモのメディア論—社会運動社会のゆくえ (筑摩選書)』筑摩書房 2012
- 鄭鎬碩「貧者の想像—アントニオ・ネグリにおける『想像』をめぐる一」『思想』通巻1024号 2009年7月 pp. 51–70.
- 柄谷行人『隠喩としての建築』冬樹社 1979
- Marx, K., *Capital: A Critique of Political Economy*, vol. 1, International Publishers. [1887] 1967.

- Negri, A., *Revolution Retrieved: Writings on Marx, Keynes, Capitalist Crisis and New Social Subjects (1967-83)*. London, Red. Notes. 1988.
- , *Marx Beyond Marx: Lessons on the Grundrisse*. New York: Autonomedia. 1991.
- , *Time for Revolution*. New York: Continuum, 2003.
- , *Movimenti Nell'Imper*. Raffaello Cortina Editore, 2006. (A. ネグリ著 上村忠男監訳, 堤康徳・中村勝己訳『アントニオ・ネグリ講演集 下〈帝国〉的ポスト近代の政治哲学』筑摩書房2007)
- , *Commonwealth*. Harvard University Press, 2009.
- Negri, A. & Hardt, M., *Empire*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 2000.
- , *Multitude: War and Democracy in the Age of Empire*, Penguin Press, 2004. (A. ネグリ・M. ハート著 幾島幸子訳『マルチチュード—〈帝国〉時代の戦争と民主主義』上・下, NHK ブックス, 2005)
- A. ネグリ・M. ハート・D. ハーヴェイ著 吉田裕訳「『コモンウェルス』をめぐる往還」『現代思想』第41巻第9号 2013年7月 pp.72-89。
- Park, R. E., *On Social Control and Collective Behavior*, University of Chicago Press. 1967.
- Taylor, C. *Modern Social Imaginaries*. Duke University Press, 2004.

Transformation of Space, Time for Metamorphosis:
David Harvey and Antonio Negri on the Strategy for
Social Change and Imagination

Hoseok, JEONG

Abstract

David Harvey and Antonio Negri are two leading theorists in the recent revival of Marxism under globalization and neo-liberalism. This paper explores their theoretical divergence on social changes and imagination. While both of them initially started their intellectual struggle by declaring a fundamental separation from the teleological-deterministic tendency in Marxist theory, they have developed contrasting styles of arguments, especially on the chances of anti-capitalistic insurgence and radical social change.

While Harvey, with a dialectical perspective on the transformation of spaces in which “*insurgent architects*” resist capitalism, proposes a renewed utopianism as endless progress, Negri tries to redefine materialism itself with a new concept of “*Kairos*”: an indeterminate moment when people’s revolutionary resistance and the constitution of “*multitude*” occurs. By clarifying Harvey and Negri’s arguments on key issues, such as understandings of time and space, dialectics, the agent of revolution, and utopianism, this paper shows how “*imagination*” is conceptualized in their arguments on social change, which can be summed up as “transformation of space” (Harvey) and “time for metamorphosis” (Negri).

Key words: Social Change, Imagination, Dialectics, Transformation, Metamorphosis